

美術の窓(159)

MIND TRAILの「曾爾村」を歩く

大和文華館館長 浅野秀剛

新型コロナウイルス蔓延の影響は、日本のアートプロジェクトにも大きな影響を及ぼし、中止や延期、規模の縮小が相次いでいる。そんななか、昨年の秋に始まり、今年の秋に2回目を開催した「MIND TRAIL 奥大和 心のなかの美術館」は、少しユニークなアートプロジェクトといっている。

その最大の特徴は、歩かなければいけないということである。作品の置かれてある場所、歩かなければ見られないものも多い。ほとんどが野外展示で、それを回るためのハイキングコースが設定されていて、そのコースの一部は車が通れない。一口で言えば、ひたすら歩いて野外作品を探しながら回るアートプロジェクトなのだ。

MIND TRAILは吉野町、天川村、曾爾村の3エリアに分かれている。私が歩いたのは、去年も今年も曾爾村だけである。曾爾を選んだのは、単に一度も行ったことがないという理由だけで他意はない。

昨年は、11月13日金曜日に曾爾に行った。私は車を運転しないから曾爾に行くにはバスかタクシーに乗るしかない。最寄りの鉄道の駅は近鉄の名張か榛原なので、名張からバスで曾爾役場前まで行き、そこから歩いた。主催者が作った地図には「全長約8.4km、所要時間約3時間」とあったが、10時

50分ごろ役場前を出発し、最後の行程を少し省略して戻ったのは13時20分くらいなので、2時間半ほど歩いたことになる。地図を手にししながら慎重に確認し、コースにあった全作品を見ていくつかのものをスマホで撮影した。一か所、倉庫のような建物に展示されているものがあつたが、ほぼすべて野外展示で、多くは道端に置かれていた。地図にあつたのは8組35点であるが、後で照合すると、地図にあるのに展示されていない作品もあつたように思う。戻った後、昼食を食べられる店を役場で聞いてくつろぎ、バスの時間まで曾爾川沿いを散歩した。時折、鎧岳の雄大な岩を見上げながら、清い流れに架かる小さな沈下橋を渡るなどして曾爾の空気と戯れた。

今年は、11月6日土曜日と11月24日水曜日に曾爾に行った。6日に名張駅から乗ったのは曾爾高原行のバスである。曾爾といえば曾爾高原と言われるほど有名なのに私は一度も行ったことがなかったので、高原をチラリと見て、それからMIND TRAILのコースを歩こうと思ったのである。駅に着いたら、高原に行く人がバス停にズラリ。これでは無理と思ったら臨時バスが出た。おかげで曾爾高原に行って絶景を満喫することができた。しかしその後が

いけない。帰りのバスは14時過ぎまで。だから歩いた。途中、曾爾高原ファームガーデンでお昼を食べたこともあり、MIND TRAILのコースにたどり着いた時は14時を回っていた。今年のコースは「全長約10.4km、所要時間約6時間」なので、それからではとても無理。第一足がもうガクガク。結局、役場付近の作品を少し見て帰った。そこで24日に再チャレンジ。その日はコンビニでおにぎりを買い、途中歩きながら食べて奮闘し5時間ほどで全コースを踏破した。地図にあつたのは15組の40点ほどであるが、全部を正確にチェックするのは大変で、見落としもあつたと思う。

去年1回、今年は2回も曾爾を歩くことができ、足腰も鍛えられ、個人的には満足であった。作品を見るのが主目的？なので、それにも拘ったが、総じて大自然を満喫し、その雄大さと造形の妙に心を揺さぶられた。自然が作る造形に向き合わなければならぬ人間の作品は大変で、気の毒だというのが率直な感想である。一番心に残ったのは、今年、曾爾村健民運動場の真ん中に置かれていた鈴木文貴氏の「草の建築」で、藁で作った縄文の住居様のものである。初めに目にしたときは、グラウンドの中央に刈り取った草を積み上げているのだろうと思ったが、通り過ぎてから作品の一つ見逃していることに気づいて引き返したら、積藁が作品と気づいたのだ。ぐるりと一周しながら、

もう少し大きい方がいいな、とか勝手なことを考えた。

野外に置かれるアートは、美術館などの屋内に展示されるものとは違った難しさがある。まずは自然に対峙しなければいけない。そうすると、やはり一定の大きさがいる。そのうえで、自然と全く別の造形にするのか、調和を考えるのか、対抗(喧嘩)するのかを思案することになるのだろう。自然と正面から対峙したくなければ、家屋とか塔とか広場とか、何らかの人工物と関連づけるしかない。コンセプトよりも見た目重視だな、一瞬ですうっと心に入るのがいい、などと勝手なことをあれこれ考えた。

MIND TRAILは、パンデミックのために観光客が激減した奈良県南部・東部の活性化の一環として、県が呼びかけ、吉野町・天川村・曾爾村が応じて始まったという。コースは設定されているものの参加費等は徴収せず自由に見て回るようになるため、参加人数の把握は難しいが、土日休みはかなりの方が歩いていたと聞いた。

日本のアートプロジェクトは世界的に見てもユニークな存在らしいが、主催し、成功させるのは至難である。何をもちって成功というかも人と立場によって変わると思われるが、資金、スタッフの両面で継続できるシステムが構築されたら成功と私は考えている。資金面で、公の予算や助成金を得るのが望ましくないとは思わないが、いわば、祭のようなもので、お金を出してもいいという人と、お金を貰わなくても参加したいという人が、あるレベルでないと成り立たない。縮めていうと、お金、ボランティアスタッフ、地域の協力、作品の魅力が揃い、一定の集客が必要になる。だから難しい。今の日本のアートプロジェクトの多くは、作家の制作意欲に寄生して成り立っていると私は考えている。

大和文華館のある学園前地区で毎年開催している「学園前アートフェスタ」も、去年と今年は予定の変更と規模の縮小を余儀なくされた。他人ごとではない。



図1 鈴木文貴「草の建築」



図2 鈴木文貴「草の建築」と鎧岳



図3 道に張り出していた枯れた倒木。最初はこれも作品?と思った。今年もそのまま残っていた。

季刊 美のたより No.217

令和3年12月24日

発行 大和文華館